

# 時空間と公益

## — 文化としての建築創作論 —

前田 哲男

山口県立大学附属地域共生センター

## Space-Time and Public Interest

### — Monograph on Architecture for Culture —

Tetsuo MAEDA

YPU Center for Cooperative Community Development

#### Abstract

Kitaro Nishida created a unique philosophy through revealing the underlying structure of the world. From literatures in early stage of Nishida, this study is an attempt to make up one of the theory of creative architecture. It is very important that human rights are respected and we become free. But, the released free desire may run recklessly.

The intention to the public interest looked at Nishida's philosophy overcomes mechanical everyday life. And it is considered that the public interest leads to a creative production activity.

By holding the essence of Nishida's philosophy, I consider how to design the architecture which realizes the concord with people's independent and free activity.

Key words: Value creation, Architecture, Chora, Space-time, Public interest, Ethics

キーワード：価値創造、建築、場所、時空間、公益、倫理学

#### 1. 序

社会における人々の自由な活動の舞台ともなる建築物や人工的な環境は、環境や建築設計の背景にある価値観や世界観、言い換えると思想や哲学によって、そのあり方が様々に変質すると考えられる。たとえば監獄のように人々の自由を拘束する空間、あるいはアメとムチで人々を制御しようとするシステムに基づく空間から、人々の自主的で自由な活動を誘導あるいは支援する空間まで、建築環境は多種多様である。人々は、その置かれた環境や空間によって、多大な影響を被ることを考慮すると、安易な姿勢での建築設計は、人々の自主的で自由な活動を阻害するということによって、社会に対して許されない行為に陥ってしまう可能性があると思われる。

様々な人々の自主的で自由な活動との呼応を実現する建築設計を目指すとき、建築物や環境を使用対象という視点だけでとらえ、それを操作することだけでは不十分であると考えている。

ところで、時間的に移り過ぎていく精神的な認識や判断と、これを超越する対象との対立を考えることによって、数学や物理学の体系が生まれてきている。環境や空間さらに人々の精神を対象的にとらえ、数学や物理学を基礎にした自然科学的な研究によって様々な知見が登場し、環境や建築設計に応用されていることは確かである。しかし、数学や物理学の体系からでは、たとえ様々な有益な知見が明らかにされたとしても、一人ひとりの人間の権利を擁護するという思想は直接には登場してこない。「かくある」ということから「かくあらねばならない」という規範を直接に立てることはできない。

人口減少の伴った少子高齢社会においては、物の豊かさよりも心の豊かさを追求すべきだと随所で叫ばれている。現代は、近代物質文明を主導してきた市場価値に替わる価値観を創出する時代であり、スクラップ・アンド・ビルドの時代を乗り越えるための新たな価値観を創造し、社会に根づかせる世の

中に移行していくべきだと考えている。このために、環境や建築設計に携わる専門家においては、自分自身の倫理観を含めた基本的な姿勢を今一度点検し反省することが、喫緊の課題である。そしてそのためには、現実の世界の根本的構造を明らかにすることを通して、われわれ人間の究極的な支えは何かということを探求し、確認する必要がある。

本研究は、現実の世界の根本的構造を明らかにすることを通して独自の哲学を創造した西田幾多郎の初期の文献から、建築創作論の一端を構成しようとする試みである。

## 2. 西田とカントの認識論

西田幾多郎（1870-1945）は、ほぼ同時代のベルクソン（1859-1941）だけではなく、カント（1724-1804）やフィヒテ（1762-1814）、さらに新カント学派と呼ばれる哲学者達の文献を渉猟している。ここで西田の認識論を検討する前に、カントの認識論を整理する。

われわれが対象を認識する最初の段階について見ると、われわれに先天的に備わった、空間と時間という感性的直観形式に従って対象を受けとることが主張されている。ここで、この感性的直観形式によって受容されるものは「現象」であり、感性的直観形式によって受容される以前の「物自体」は認識できないとされている。そして、感性的直観に与えられた多様な現象を、純粹悟性概念（カテゴリー）によって思惟し判断することによってわれわれの客観的認識が成立するという。つまり、主観に備わった形式によって客観を受容し、カテゴリーによって対象を構成することが認識であると考えられている。

このカントの認識論は主観と客観との対立から出発している。そして、認識されるものは現象であり、物自体は認識されない。そのため、人間の認識には或る限界があり、「世界は時間的に始めをもち、空間的に限定されているか否か」等のアンティノミー（二律背反）が登場することになる。

このカントの認識論は、数学や物理学が成立する根拠を示している。自然科学の世界では、顕微鏡や望遠鏡など様々な観測装置の発達によって、われわれが体験できる世界が広がり、様々な知見が得られている。しかしここに展開されているのは、あくまで、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、観測できるものについての認識である。

しかし、われわれの生活においては、対象的にとらえることのできない目に見えないものや耳に聞こえないものの認識も重要である。たとえば、反省をする際にわれわれは自分自身を自覚するが、カントの認識論は、この自覚のように「意識するものを意識する」ことを的確に説明できるものにはなってい

ない。また、良き人間関係を構築しようとするとき、言葉として表明されていない他者の心を理解することはとても重要なことではあるが、そのときの精神の機構を説明できるものにもなっていないと考えられる。

カントを代表とする主観と客観を明確に分ける立場、精神界と物質界の独立存在を想定する二元論的世界観は、思惟による抽象の産物であり、その適用範囲は狭いと考えられる。

カントの認識論に対して、目に見えないものや耳に聞こえないものの認識を問題にした西田は、いまだ主観と客観とが分かれていない未分化な直接の経験から出発する。それが西田の第一の主著『善の研究』で表明された純粹経験の説である。主観と客観の分裂以前の純粹経験とは、思慮や分別の加わる以前の、意識の統一的状態のことである。我々の意識は具体的であり、或るまとまりを持ったものである。そして意識がさらに具体的に明瞭になるということは、意識の或るまとまりが背景としての地から分化し、明瞭な図として発展していくということになる。

## 3. 場所とは

1927年（昭和2年）に刊行された『働くものから見るものへ』には、9つの論文が収められている。「働くこと」とは「意志的な行為」であり、「見ること」とは「直観」であり、この著書は、主意主義から直観主義への転換を図った論考である。

西田の『善の研究』という書名にみられるように、哲学は倫理と深く関係する。倫理の問題を考えたとき、他者の命令によって行動する他律ではなく自律が重要になってくる。モラルもモラールもともに自発的で自主的でなければならない。自律とは自分が自分を反省すること、自分を見つめ直すこと、自分が自分を自覚することを重視する世界である。

西田は『自覚に於ける直観と反省』（1917年）において、自覚の問題に悪戦苦闘している。たとえば、自分の目を自分の目が直接見ることはできない。そのためには、鏡に映された自分の目を見て想像することになるが、そのとき、自分の目そのものを見ていないわけではない。同じように、意識している自分の意識を対象物として自分が意識した途端に、それは「意識される意識」であり「意識する意識」ではなくなってしまう。また、自分の意識を対象物としてその活動場所を探すと、自分の脳の中に自分の意識を想定することになる。そして、脳の中に小さな自分を想定すると、小さな自分の中にさらに小さな自分が登場し、無限にこの連鎖が続いていくことになる。つまり、このように、自覚という行為そのものを的確にとらえることはとても困難である。

また、自覚においては、主観としての意識と客観

としての意識を分離することはできない。自覚では知るものと知られるものが一つであり、それは主客の分化がない状態であると考えられる。この自覚という問題に悪戦苦闘した後に、『働くものから見るものへ』という著書が登場してきている。そしてこの著書の中に、『哲学研究』第123号(1926年)に発表された「場所」という論文がある。

この論文のはじめに登場する「場所」の定義を以下に引用する。

「論理的には関係の項と関係自身とを区別することができ、関係を統一するものと関係が於であるものとを区別することもできる筈である。作用の方について考へて見ても、純なる作用の統一として我という如きものが考へられると共に、我は非我に対して考へられる以上、我と非我との対立を内に含み、所謂意識現象を内に成立せしめるものがなければならぬ。此の如きイデアを受取るものと云ふべきものを、プラトンのティマイオスの語に倣うて場所と名づけて置く。」<sup>1)</sup>

われわれが物事を考えるとき、非我としての自然や他者と、どう向き合うかということが問題になってくる。そのとき、非我との関係において様々な意識現象が登場するが、関係においてある意識の野に意識現象を映すと考えることができ、この意識の野が「場所」である。この関係においてある場所に登場した、いまだ主客未分化状態の意識、我と非我との対立を内に含んだ意識が、意識を意識することによって明瞭になってくると考えられている。

そして、この場所は、プラトンのイデアを受取ると考えられている。このイデアは、学的で知性的な認識の対象である。

しかし、「プラトンの哲学に於ては、一般的なるものが客観的実在と考へられたが、真にすべてのものを包む一般的なるものは、すべてのものを成立せしめる場所ではなければならぬといふ考には到らなかつた。」<sup>2)</sup>と語っている。意識の野はさらに深め広げることができ、それはイデアを成立させる場所、学的で知性的な場所以上に深め広げることができるという主張である。

#### 4. 三つの場所

西田は「意識する意識」を関係においてある場所に鏡のように映し出してとらえようとしている。そして、われわれの「意識する意識」は深め広げることができる。

「最も深い意識の意義は真の無の場所といふことでなければならぬ。概念的知識を映すものは相対的無の場所たることを免れない。所謂直覚に於て既に真の無の場所に立つのであるが、情意の成立する場所は更に深く広い無の場所ではなければならぬ。此故

に我々の意志の根柢に何等の拘束なき無が考へられるのである。」<sup>3)</sup>と、情意の成立する場所は概念的知識の成立する場所より、さらに深く広く、意志の根柢に拘束なき無が考えられると語っている。

この深めるとともに広くなるという記述は、人間の意識を円錐に置き換えてイメージしているのではないと思われる。この円錐は、記憶を扱ったベルクソンの『物質と記憶』に登場している。過去の出来事を記憶する能力が人間に備わっていることによって、人間に意識が登場してくる。そして、未来は現在になり、現在は過去になるという時間の連続性から、現在は点として表示するしかないが、記憶は、点であらわされる現在の状態よりもより深く広いと考えられ、それが円錐に置き換えられている。

この円錐には頂点から底面までの途中にいくつかの平面を想定することができる。

「唯、真の無の場所に於てのみ自由なるものを見ることが出来る。限定せられた有の場所に於て単に働くものが見られ、対立的無の場所に於て所謂意識作用が見られ、絶対的無の場所に於て真の自由意思を見ることが出来る。」<sup>4)</sup>このように、知の成立する場所である「有の場所」、そして情意の成立する場所である「対立的無の場所」、さらに「絶対的無の場所」と三つの場所が語られている。

ここで、「絶対的無の場所」は、真の自由意志の場所でもあるとの主張が登場している。「意識する意識」を深めていくと「絶対無の場所」に至り、「意識する意識」には自由があるという主張は、人間関係の評価や判断と関連させて応用することができると考えられる。

社会には様々な人々が登場し、そこには様々な人間関係が存在する。たとえば「あの人は良い人である」という表明は人間関係の判断の一つであるが、その判断は、その判断のおかれる場所によってその意味を変えていく。というのは、たとえば会社にとって良い人が、必ずしも家族にとって良い人になるとは限らない。人を評価するとき、その評価される人が抱いている「意識する意識」の深さと広さによって、様々な人間関係に関する評価や判断が登場してくる。西田は境涯や境地という用語を用いてはいないが、心の状態を示すこの境涯や境地の広さや深さに注目していると思われる。

そして人間関係においては、羨望や嫉妬などの様々な欲望が登場してくる。われわれは、様々な欲望を抱き、様々な利益を追い求めて社会的な活動に取り組んでいる。ところで、利益には私的なものと公的なものがあり、現実の社会生活の中では、個人の権利と公共の福祉、言い換えると私益と公益が対立することが多々ある。このとき、人間の自主的で自由な判断として、どちらを優先するかは重要な問



題である。「意識する意識」がどちらの立場に立っているのか、西田はこうした問題に対して、「場所」の論文では、「私益へのこだわりを捨てろ」とか、「公共の福祉や公益が重要である」と直接には語っていないが、こうした問題への回答の準備がなされていると考えられる。

## 5. 主語と述語

西田は場所の理論を知性的な側面から説明するために、言語における主語と述語との関係から議論を深めている。

「従来の哲学は意識の立場について十分に考へられていない。判断の立場から意識を考へるならば、述語の方向に求めるの外はない、即ち包摂的一般者の方向に求めるの外はない。」<sup>5)</sup>と、判断することは包摂的關係を見極めることである。そして、場所を深めることは述語の方向に広げていくことであり、それは包摂的一般者の方向であると語っている。

形式論理学では、「AはAである」という同一性からその体系が作られているが、単なる同語反復では意味がない。そして「SはPである」という判断においてはSとPとの関係が問題になっているが、場所とはこの関係がおかれている意識の野であるから、たとえば「Sは色において赤である」という文章、あるいは「Sは赤においてある」という文章を問題にしていると考えられる。また、「意識する意識」は「AはAにおいてある」と包摂的關係でとらえることができる。そして、「Sは赤においてある」という包摂的關係は、「赤は色においてある」「色は性状においてある」「性状は自然においてある」等々、包摂的一般者の方向に押し進めて行くことができる。

「我々は常に主客対立の立場から考へるから、一般概念は単に主観的と考へられるのであるが、抽象的一般概念を映す意識の鏡は所謂客観的対象を映すものをも包んで尚且つ深く大なるものでなければならぬ。」<sup>6)</sup>と語っているが、自分の意識を見るには、場所という鏡に映すしかなく、意識の鏡には主観的なもの客観的なものの両方が映し出され、意識の鏡は深く大なるものへと押し進めて行くことができる。

「唯、包摂的關係に於ての一般的方向、判断に於ての述語的方向を何処までも押し進めて行けば、私の所謂真の無の場所といふものに到達せなければならぬ。」<sup>7)</sup>と語っているが、このように「意識する意識」である円錐を深く広げていったときそこに無の場所が登場する。

「すべての経験的知識には「私に意識せられる」といふことが伴はねばならぬ、自覚が経験的判断の述語面となるのである。普通には我といふ如きもの

も物と同じく、種々なる性質を有つ主語的統一と考へるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点でなくして一つの円であればならぬ、物ではなく場所でなければならぬ。」<sup>8)</sup>

我が述語的統一であるということは、包摂關係から見れば、我は「包摂するもの」ということになる。あるいは、関係のおかれている場所ということになる。これを人間関係に当てはめて応用すれば、「Aは家庭において、良い人である」「Aは会社において、良い人である」「Aは日本において、良い人である」等の判断において、おいてある場所の深さや広さが私の人格と関連することになる。西田が場所という概念を提示していることは、公益性を根柢に据えた人の心の状況と倫理性との関連に注目していると考えられる。

ところで、「Sは色において赤である」という文章において、色のおいてある場所には多種多様な色による様々な差異のうごめき、カオスとも言うべき無秩序な混沌が想定される。図としての「赤」が分化発展してくるその背景には、多種多様な色の混沌があるとも考えられる。

しかし、西田は、多種多様な色という無秩序な混沌とした状態ではなく、純粋な「真の無の場所」の方に現実の世界の根本的構造を見ている。こうした現実の世界の根本的構造を反映して、人間の創造的発想は、無秩序な混沌状態からではなく、「真の無の場所」から登場する。曖昧さや不純さとは無縁な無から有が登場すると考えられている。

多種多様な欲望の渦巻く無秩序な混沌とした状態と公益性とは結びつかない。「意識する意識」を深めていくことは、一般性や普遍性を追い求めることであり、様々な個人的な欲望が制御された、公益性と結びつく無私や無我の世界を重視していると考えられる。しがらみや囚われを払拭した無私や無私の境涯や境地に立てたとき、新たな価値の創造が可能になると思われる。

## 6. 時空間

「場所」の理論は一見すると空間論的な様相を示しているが、西田は時間論に関心を持っていなかったのだろうか。「場所」の論文が掲載されている『働くものから見るものへ』は前後2編に分けられ、前編には、『思想』第27号(1924年)に発表された「物理現象の背後にあるもの」という論文があり、つぎのように時間と空間との関係を扱っている。

「普通には時間空間の結合によって力といふものが考へられるのであるが、私は却って我々の意志の表現として先づ力といふものが考へられ、その一般的形式として時間空間といふものが考へられるので

あると思ふ。空間と時間とは共に所謂実在の形式として別々のものではない、内面的に結合したものでなければならぬ。」<sup>9)</sup>と時間と空間との一体性が語られている。

ところで、ベルクソンは時間と空間との本質的な差異に注目し、時間を数直線で表現することを強く否定した。

ベルクソンに影響されてE.ミンコフスキー(1885-1972)も時間と空間の問題を扱っている。彼は、「生成と存在、時間と空間は、一見そう思われるよりはるかに密接に相互に結合されており、はるかによく合致し合うように思われる。身体と心の連帯に比べうような、根本的な連帯性が空間と時間との間にあると思われるのである。」<sup>10)</sup>と語り、生きられる時間のうちには力動的な性質とともに静的な性質すなわち空間的な性質も含まれているとしている。西田もベルクソンを尊重しているが、時間と空間の問題に関してはベルクソンに反し、またミンコフスキーと同様に時間と空間との一体性を意識している。

「場所」の論理は空間論的な様相を示しているが、すべて実在的なものは時においてあると考えられ、時間をも加味して理解していく必要がある。「真の無の場所」とは、時間においても無ということである。記憶の円錐において、過去になればなるほどその記憶が消失していくということはイメージし易い。しかし西田の無は、単に記憶や欲望を消去するという行為の果てに登場してくるものではなく、精神を深め広げることである。そしてそのことは、無を人間の創作行為の源泉として考え、無は無限な可能性を秘めているということを前提にしていると思われる。現実の意識は無限に深く広いものの中に浮かんでおり、真の我は無限であり自由である。

ところで、「私は私である」という自己同一性が自我であり、あらゆる自我を尊重する姿勢は、人権意識の強化につながる。しかし、「私が私である」という自己同一性に時間の要素を取り入れてみると、厳密に言えば、昨日の私と今日の私との間には差異があることがわかる。それでも同一であると言うためには、基本部分(実体)が変化しないと考えるか、基本部分が変化しても、着衣の部分がそれを補っているのと同じに見えるようになる。しかしどちらの立場を取るにしろ、自我が実体であり、まったく変化をしないと考えることには、かなりの無理があると思われる。

たしかに自己同一性とその永遠性は人権思想に結びつく。しかし一方で、自己反省の行為の重要性とともに、自己自身の変化や発展、そして人間性の向上に目を向けるべきであるとも考えられる。人間の創造的行為は自己自身を発展させる創造作用でもあ

る。そのとき、境涯や境地という精神の状態を示す、時空間の大地としての場所の公益性が、重要になってくるのではないだろうか。

## 7. 建築と場所論

ゴシック建築研究の第一人者と目され、西洋建築史、建築論を専門とする前川道郎(1931-2000)は、1994年に建築的場所論研究会と称する研究グループをつくり、「建築的場所論」に関する共同研究を始め、1997年に『建築的場所論の研究』を発表している。この著書には、狭い意味の場所論の枠組みの外縁のものともみられる論文も収録されている。前川は共同研究の代表的立場で「序論〈場所〉ということ」を執筆している。「場所」というキーワードは、哲学や文化諸科学において注目され、多様な意味に用いられており、多様な場所論をこの序論で整理している。

この様々な場所論を紹介する節の冒頭で、「建築的場所論は建築空間論のうちから発展的に成立してきたものであり、建築空間論の一部をなすものとみることでもできよう。しかしながら、〈空間〉ではなくてあえて〈場所〉を論じることが要請されたのであるから、それはなによりも〈空間〉という語と〈場所〉という語の含意するところの差異にあることは間違いない。」<sup>11)</sup>と語っている。このように前川においては、空間論と場所論との本質的な差異に対する関心が強くなっている。

「哲学的場所論といえば常にあげられるのが、いまでも触れたアリストテレス、(中略)西田幾多郎の〈場所的論理〉である。」<sup>12)</sup>と語っているが、西田哲学の具体的内容については紹介していない。そして「近年とりわけ注目されている哲学的場所論はなによりも上田閑照の『場所-二重世界内存在』(1992年)と、(中略)中村雄二郎の『場所-トポス』(1989年)であろう。」<sup>13)</sup>と上田と中村に注目している。中村については、場所を①存在根拠としての場所、②場所としての身体、③象徴空間としての場所、④言語的トポスと4つの観点から考察をしていることを紹介している。さらに、ボルノウ、ハイデッガー、ノベルク=シュルツの場所論の紹介が続き、ゲニウス・ロキについての言及も登場している。

そして最後に、「すなわち、私は、ハイデッガーやボルノウに従って、〈人間とは空間的存在である〉を人間の本質規定と見定めて、〈住まう〉とは人間が空間的に生きることそのことを意味する、と理解しているが、それに従えば、場所は、あるいは建築は人間存在の本質規定である空間を根拠としているはずであり、人間存在とのかかわりにおいて解明されなければならないであろう。」<sup>14)</sup>と語っている。

前川も西田と同様に人間存在の本質規定を重視し

ている。しかし西田の場所論は、人間存在の本質を通して現実の世界の根本的構造を明らかにしようとするもので、時間論をも含んでいる。西田においては空間論と場所論との差異、時間論と場所論との差異に関心はなかった。

自然科学においては、様々な現象の背後にある統一的な法則を得ようとするとき、とりあえず限定的な領域での法則を発見し、そこから世界全体を支配している原理を発見しようとする。それに対して西田は、初めからすべてを包括的にとらえることのできる説明原理を求めており、それが意識する意識を映す場所という原理であったと考えられる。

## 8. 結論

人間の心的能力を感性、悟性、理性と分類することにどれほどの意義があるのであろうか？心をその要素に分解して終わるのではなく、生きた根源的な連関において把握する必要がある。客観と主観とを分離し、心の機能を分類する発想は、自然科学を成立させる抽象的な思考の結果登場してきたものである。自然科学による知見が生産に関わり文明の創造を繰り返してきた。その一方で人間の権利や自由に関わり文化の創造を目指すことも重要になってきている。西田は、新しい価値を創造する可能性のある場所の理論に絶大の関心を寄せ、現実の世界の根柢には場所の理論があるとした。

ところで認識論は、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くということ、さらに自覚をも説明できるものでなければならない。そして、場所の理論に伴っている倫理観は、機械的な日常生活を乗り越え、創造的生産活動へ導くものであると考えられる。

人権が尊重され自由になることはとても大切なことである。しかし、解放された自由な欲望は暴走し、不当に利用され、見えがかりの造形の新奇さに走ってしまう可能性もある。そうした事態を阻止するの

が場所の理論である。特に絶対的無の世界に登場してくる公益性への志向は、欲求能力に関しての上位の能力であり、良心の叫びにもつながるものである。

欲望を消去した平静な観照の状態ではなく、また、多種多様な差異がうごめく無秩序な混乱状態でもなく、公益性を伴った絶対的無の場所が、多様性の尊重された独創的な生産の世界の契機になる可能性がある。また、絶対的無の場所は、永遠的で普遍的なるもの（超感性的基本法則）と関係し、優れた創作活動を誘引するとも考えられる。

西田の場所の理論は、単に哲学の一分野ということではなく、現実の世界の根本的構造を示し、人間の無限の可能性を伴い、同時に、人種や人権問題から完全な市民体制の形成まで、幅の広い射程を備えていると考えられ、建築家の基本的な姿勢として重視すべきものであると考えられる。

## 註

- 1) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第三巻、岩波書店、東京（2003）、p.415
- 2) 西田幾多郎：前掲書、p.427
- 3) 西田幾多郎：前掲書、pp.427-428
- 4) 西田幾多郎：前掲書、p.433
- 5) 西田幾多郎：前掲書、p.462
- 6) 西田幾多郎：前掲書、p.462
- 7) 西田幾多郎：前掲書、p.467
- 8) 西田幾多郎：前掲書、p.469
- 9) 西田幾多郎：前掲書、pp.296-297
- 10) E.ミンコフスキー、中江育生・清水誠訳：生きられる時間 I、みすず書房、東京（1972）、p.32
- 11) 前川道郎編：建築的場所論の研究、中央公論美術出版、東京（1998）、p.9
- 12) 前川道郎：前掲書、p.13
- 13) 前川道郎：前掲書、p.14
- 14) 前川道郎：前掲書、pp.22-23